

登壇者発表要旨

第一部 ヨーロッパ編

発表者：中井杏奈（なかいあんな）

タイトル：ルヴフ＝ワルシャワ学派の戦後：ポーランド論理学の受難と変容

要旨：本発表では、小山虎著『知られざるコンピューターの思想史』でのルヴフ＝ワルシャワ学派およびタルスキの紹介を下敷きにしつつ、戦後ポーランドにおいて同学派の潮流が、国内に残った学派の担い手たちによって、どのように継承され、変化していったのかを考える。その際、（１）社会主義体制下においてルヴフ＝ワルシャワ学派は制度的に困難な状況を迎えたこと、（２）同学派の中でも数理論理学に特化した動きも顕著になっていったこと、そして（３）コンピューターの発展という点では、統計やエンジニアリングに基づく全く別の流れが生じたことに注目する。特に、（１）と（２）のそれぞれの系譜は今日もワルシャワを中心に引き継がれており、近年のポーランドの哲学史・思想史方面の研究のなかでどのように取り上げられているかについても言及する。

第二部 アメリカ編

発表者：入江哲朗（いりえてつろう）

タイトル：オーストリアン・コネクション・イン・アメリカ？——小山虎『知られざるコンピューターの思想史』をめぐって

要旨：小山虎『知られざるコンピューターの思想史』（2022）は、コンピューター・サイエンスと分析哲学といういっけん疎遠なふたつの学問分野の発展から、「オーストリア的」なもののアメリカへの移入という共通条件を読みとっている。この解釈を提示するうえでの方法として、同書は「一般向け」に書かれた「思想史」の叙述を採用している。同書のかかる主張および方法の双方に対して、本発表は批判、疑問、ないし異論を投げかける。発表者ははじめに、同書の歴史叙述への批判をとおして、「一般向け」の「思想史」であるための条件について考察する。続いて、同書で言われる「オーストリア的」なものの内実を問うとともに、それとアメリカとの関係をめぐるいまひとつの——モダニズムに焦点を据えた——歴史観をさらなる議論に供する。

第三部 コンピューター編

発表者：前山和喜（まえやまかずき）

タイトル：日本で語られるコンピュータに関する歴史

要旨：本発表では、まず、これまで日本で出版されたコンピュータの歴史に関する出版物に関して紹介しつつ、小山虎著『知られざるコンピュータの思想史』の位置づけについて整理する。次にコンピュータの開発に繋がる実践的な計算行為の歴史について紹介する。その上でコンピュータの開発に思想的側面がどれほど影響を与えていたのか、特に数理論理学以外の思想的な流れも併せて言及しつつ考察する。

発表者：高田敦史（たかだあつし）

タイトル：バー=ヒレルと機械翻訳

要旨：本発表では、小山虎『知られざるコンピュータの思想史 アメリカン・アイデアリズムから分析哲学へ』（PLANETS、2022年）では扱われなかった分析哲学史とコンピュータの歴史の接点として、イエホシュア・バー=ヒレルの機械翻訳に関する貢献を紹介する。ウォーレン・ウィーバーの覚書などを背景として、なぜ機械翻訳研究の黎明期に、言語哲学者が関わることになったのかを説明する予定だ。